

ビヤとカランサの対立

ビヤとカランサの間には当初から対立の兆しがあった。初対面の印象が悪かったとビヤは彼の伝記作家に言った。親しみやすく、心温かく、心の広いマデロと違って、カランサは冷酷で高慢、そして表裏があった。その上、両者の間にはジェネレーションギャップがあった。革命兵は若く、二十代のジェネラルも大勢いた。ビヤのように三十歳代の者は既に中年と見られていたが、カランサは五十を越え、長い髭を生やし、動きは遅く重々しかった。カランサは当初からビヤの権限を弱めることに専念し、チワワや他の占領地域で、ビヤを自分の息のかかった者の下に従わせようとした。しかし、ビヤの絶大な人気とは裏腹に、カランサはチワワにおける政治的、社会的な力は全くなかった。メキシコ革命の第二段階の初期、カランサはチワワでの政治集会や行動には一度も参加していなかった。この状況を打開するため、ソノラに向かう途中チワワでマクロビオ・エレラとマヌエル・チャオの二人の指導者との関係を作った。カランサはもと教師でチワワ指導者の中では最も教養があるチャオが気に入り、彼をチワワの革命軍最高指揮官に指名した。カランサの思惑は失敗に終わった。ビヤはチャオを脅し、自分が明らかに上であることを示し、大多数のチワワ革命指導者たちはビヤに従った。⁹⁸

次にカランサはビヤの力を弱めるため、彼をソノラのアルバロ・オブregonに従属させようとした。1913年8月カランサが送った使節にたいして、外国人に従う事は出来ないと、ビヤは撥ね付けた。北部師団がチワワを制覇するに及び、カランサにとりビヤをコントロールすることが緊急課題となった。地方の軍事指導者が最高司令官である自分に従わないということは、民政確立を目指すカランサにとっては、その原則にそぐわない重大問題であった。カランサは豊かなチワワ州から上がる収入の一部だけでも自分のものにしたかった、そのためにもビヤが極端な社会改革に取り掛かることを阻止する必要があった。

この事を念頭において、カランサはチャオを知事に任命し、ビヤを牽制した。カランサはビヤに土地の分配を止め、アブラム・ゴンザレスが行った改革のレベルに戻すことを命じた。ビヤは激怒した。憲政軍がカランサ派とビヤ＝サパタ連合の二つに分断される兆しがすでに見え始めていた。チャオを含めたチワワの軍事指導者たちは、カランサがチワワ州知事を決定することに疑問を投げかけ、ビヤ自身が知事になるきっかけとなり、カランサの動きは裏目に出た。カランサは次々と部下をチワワに送り込んで影響力を強める手を打ったが、効果は殆ど上がらなかった。⁹⁹

1914年1月9日、ビヤが知事を辞め、カランサの意向を受けたチャオが知事に就任した。カランサはチャオと共にチワワ州に影響力を及ぼし、ビヤが行った改革を元に戻すことが出来ると信じていた。然し、チャオに知事職を与えたものの、ビヤの北部師団を支配する事はできなかった。しかもチャオは保守的ではなく、カランサに盲従したわけではなかった。初期の段階でチャオがカランサに発信した文書の中で、ビヤが知事として手がけた経済改革は正当性があるとして支持を表明した。カランサは落胆した。カランサは自

らの政治課題を迫行し、ビヤとチワワを支配するためには、自分の本拠地をソノラからチワワに移すことだと考え、三月ビヤの了解を正式に取り付け、彼の政府をフアレス市に移動した。カランサの到着と同時にビヤとの関係は目に見えて悪化した。ビヤにとり死活問題であるアメリカからの武器の補給路を、カランサが断とうとしていた。100

カランサはソノラ革命軍の指導者と手を組んで、マイトレナ知事を孤立させた。ビヤはカランサが同じ手を使うことを恐れていた。案の定チャオによって州政府の高官に任命されたビヤの部下が、カランサに寵愛されているのを見て、ビヤは猜疑心をつのらせていた。そうしたときにビヤの側近が、チャオがビヤを暗殺して北部師団を乗っ取ろうとしているとビヤに耳打ちした。チャオに圧力を加え、あるいは殺すためビヤはチャオにトレオン周辺の作戦に参加することを命じた。ビヤは北部師団長として命令する権限を持っていると考えたし、チャオは知事として自分で決断できるとして、カランサに相談を持ちかけた。カランサは叛乱者的な態度を示すチャオに喜んで相談に乗った。ビヤは激怒し、フアレスに乗り込んでチャオを逮捕し、射殺を命じた。チャオと対面したビヤは怒りを爆発させ、知事は今にも処刑を言い渡される寸前であったが、チャオは冷静に沈黙を守り、次第に怒りが収まると、そのような計画をした事を否定した。カランサ側の話によると、チャオの処刑を耳にしたカランサは直ちにビヤに処刑を止めるよう指示をした。ビヤは最高指揮官との関係を断ちたくなかったのと、フアレスには僅かな味方の兵しか居なかったため、カランサの命令に従った。101

4月21日、アメリカ軍がベラクルースに上陸し重要な港を占領した。メキシコ連邦軍はアメリカ軍と戦うことなく逃げ、市民と海軍学校の士官候補生が銃を取り散発的に抵抗しただけであった。占領はウイルソン大統領がウエルタを叩くために仕掛けたもので、ドイツ船がウエルタに補給する武器を陸揚げしようとする直前、ウイルソンは行動に出た。ウイルソンの目的はウエルタ政権の倒壊を早め、メキシコの政治的展開に挺入れしようとしたもので、憲政軍を大いに助けたが、ウイルソンの侵略行為にたいし、カランサは痛烈に抗議した。カランサの抗議は、彼の国粹主義的信条と政治的状况に関わりがあった。カランサが態度を明らかにしたにも拘らず、ウエルタは憲政軍をアメリカの代理であるとして非難した。これに関してはサバタもカランサに同調した。ただ一人ビヤは、カランサが反対を表明した次の日に、国境に赴き領事ジョージ・カロサーズに面会し、アメリカ軍がウエルタに対して水も漏らさぬ防衛線を張ることに反対ではないこと、更に、占領が他の地域に拡大したら、メキシコ軍は攻撃に出るであろう事を伝えた。中産階級の少ないチワワ軍は、ベラクルースは外国の都市ぐらいにしか思っていなかった。ビヤは明らかにアンヘレスの影響を受けていた。アンヘレスはビヤとカランサの間を裂こうとしていた。ビヤがベラクルース占領に関してアメリカを非難しないことで、ウイルソン政権は、それまでに多く発生した好ましからぬ問題を反古にし、以前にも増して彼に好感を持つようになった。このときカランサは、彼が目指している社会の建設とメキシコの独立にとって、ビヤ

は邪魔者であることを実感した。102

トレオンでビヤに敗れた連合軍の敗残兵がカランサの出身地コアウイラの州都サルティヨと近隣の駐屯地パレドンに逃げ込んでいた。カランサはコアウイラへ軍を回して連邦軍を粉砕することをビヤに命じた。南進して連邦軍最強の守備隊で固められているサカテカスを攻撃する予定であったビヤは、メキシコ市への進軍が遅れるとして反対し、北東師団のジェネラル・パブロ・ゴンザレスがやる仕事であることだと付け加えた。カランサは頑として引き下がらなかった。メキシコ進軍を遅らせ、地元コアウイラの北東師団ではなく、ビヤ軍に一万五千の連邦軍を攻撃させ、死傷者を出させるのがカランサの腹であった。パレドンに駐屯する連邦軍六千の指揮官は、町に繋がる線路を切断し、ビヤの軍用列車を止めれば、パレドンとサルティヨへの進軍を遅らせることが出来ると考えていた。指揮官の当ては外れた。ビヤは八千の騎兵を列車から降ろし、パレドンになだれ込み、トレオンの敗退で士気の衰えていた連邦軍をパニックに陥れた。六千の守備兵のうち二人のジェネラルを含む五百人が戦死、捕虜と負傷者は二千五百人に上った。ビヤは三千のライフルと砲十門を捕獲した。サルティヨに残った連邦軍は北部師団との交戦を避けて南へ撤退し、ビヤの北部師団はコアウイラ州都に凱旋した。ビヤは其処に止まらずサルティヨとその周辺をカランサに手渡し、カランサはやっと地元コアウイラ州に本拠地を構えることが出来た。

103

ビヤはこれだけの犠牲を払ったからには最高指揮官も喜んである程度の譲歩をしてくれると期待して、6月8日、シルベストゥレ・テラススをサルティヨに送り込んだ。ビヤが望んだものは、サカテカス攻略を目指して南下することを妨害されないためにメキシコ北部の鉄道網を掌握することであった。サカテカスには連邦軍が残した最大級の要塞があり、ウエルタは精鋭部隊を投入していた。一方カランサは、ビヤがサカテカスを占領することを断固として許さなかった。カランサにとって、メキシコ市への凱旋一番乗りを果すことは最重要課題であった。サカテカスはその進軍ルート上にあり、ビヤに占領されると一番乗りは果せなかった。カランサは元ビヤの部下であったパンフィロ・ナテラをビヤと同じ階級に引き上げ、その下にビヤに反対する者を集め、それらを中央軍団と呼び、メキシコへの道を開くため、ナテラにサカテカス攻撃を命じた。サカテカスから連邦軍を追い出したら、カランサは西を南下中のアルバロ・オブレゴンと共にメキシコ市へ進む腹であった。ナテラ軍は何度かサカテカスへ攻撃を掛けた、しかし重砲と機関銃の前にその都度撃退され、カランサの計画は失敗に終わった。

カランサは迷った。サカテカス軍を倒せるのは北部師団しかなかった。しかし、その足でビヤがメキシコ市へ入ることは許せなかった。そこで彼はナテラにサカテカスを取らせ、同時にビヤの北部軍団を弱める策略を考えた。彼は北部師団から五千人を分け、ナテラの下につけ、サカテカ攻撃を命じた。ビヤは北部師団の崩壊を恐れてカランサに再考を求めた。テラススがサルティヨから答えを持ち帰り、カランサは一步も譲らなかつたことを報

告すると、ピヤは烈火のごとく憤り、サルティヨへ押しかけて、あの老人の首をはねる、と喚きたてた。アンヘレスや他の部下の説得で、怒りの収まったピヤは、思いとどまった。

104

ピヤが憤ったのはカランサの強情のためではなく、カランサに欺かれたことを悟ったからであった。ピヤはカランサに心底から譲歩をしてきた。彼は鉄道の支配権を渡し、チワワ知事のポストをカランサの指名する者に渡した。更に彼のメキシコ市への進軍を延期した。それらに対する見返りは何もなかった。シルベストゥレ・テラサスの使節で何も得られなかったことで、ピヤはカランサとの交渉は無駄であり、意見の相違を埋める事は出来ないことを悟った。この時点からピヤは配下のジェネラルに、最高指揮官に裏切られたことを理解させようと務め、北部師団の将校たちの間で分裂が起こるのを食い止めようとした。彼の部下の大部分は、北部師団を分断しようとするカランサの命令には反対であった。とりわけ将校も兵士も、負けたナテラは頼りにならなかった。メキシコ最強の要塞を攻撃し、自らを犠牲にする時は頼りにならない指揮官の下ではなく、勝つと信じる事が出来るピヤのような指揮官のもとで戦いたかった。ピヤは最高指揮官と交渉するには部下のジェネラルの支持が必要と考え、6月11日、アンヘレス、コントゥレラス、オルテガからなる委員会を結成してカランサとの折衝にあたらせることにした。105

委員たちが出発する前に異変が起こった。ピヤはもう一度北部師団がナテラのサカテカス攻撃に援軍を送ることを、もう一度再考するようにカランサに打電した。電文でピヤは、ナテラのサカテカス攻撃は間違っていて、敗退は当然であったとして、それを命じたカランサを遠まわしに非難した。更に自分の部下をナテラ支援に送り込むことは自滅行為であり、彼の兵士は無駄死にし、再び攻撃は失敗すると断言した。サカテカスの最大で最強の連邦軍を破る方法はただ一つ、自分が北部師団を指揮してサカテカスに総攻撃をかけることであると述べた。カランサは再度ピヤの願いを退け、五千人の援軍をナテラに渡すことを命じた。この時点でピヤはカランサに辞表を出した。これにより、これまでピヤがてこずっていた反ピヤ色の濃い者も含め、全てのジェネラルがピヤ支持で結集することになった。事の重大さを読み取ったアンヘレスは事態の收拾に動いた。全てのジェネラルが一致して懸念したのは、士気の衰えた連邦軍が盛り返し攻勢に転ずれば、戦争は更に長引くであろうということであった。アンヘレスはカランサがピヤの引退を認めると思っていた。案の定その通りとなり、しかもカランサはピヤをチワワ州知事に任命し、ジェネラルたちに師団長の選出を命じた。106

アンヘレスは、全軍の士気が衰え、革命の大義を全うすることが難しくなり、国内外に与える影響は計り知れない故、再考を求めるとカランサに電報を送った。カランサはアンヘレスの願いを入れず、ピヤは辞めるべきであることを繰り返した。ジェネラルたちはどちらに付くか、選択を迫られた。彼らは一致してピヤに会いに行き、辞任を思い留まるよう訴えた。ピヤは再び北部師団司令官になった。ジェネラルたちの決断を知ったカランサ

は激怒した。カランサはビヤの復帰を認めないこと、そしてジェネラルたちが自分の承認を得ずして指揮を取ることを禁ずると言明し、最後に五人のジェネラルに状況を話し合うためサルティヨに来るよう命じた。カランサが指定したジェネラルはアンヘレス、トマス・ウルビナ、マクロビオ・エレラ、トリビオ・オルテガ、エウヘニオ・アギレ・ベナビデス、ロサリオ・エルナンデスの6名であった。カランサは慎重にこれらの名前を挙げた。そのうちエレラとエルナンデスはビヤの不倶戴天の敵で、1914年3月、ビヤがチャオを処刑しようとした折、二人は秘密裏に、カランサにビヤの処刑を進言していた。アギレ・ベナビデスはビヤと意見を異にしていた。カランサは明らかに、会議においてジェネラルを二派に分断する狙いがあった。然し会議は開催される事はなく、アンヘレスが作成した、かつてない厳しい言葉で綴られた電文にジェネラル全員が署名して発信した。それまでは最高司令官に対し礼節を守ってきた彼らは、政治と戦争の原則に背き、愛国精神に悖る行為である、とカランサを非難し、一致団結してサカテカスへ向け南進することを宣言した。

107

カランサとの衝突の結果、マクロビオ・エレラやロサリオ・エルナンデスまでが署名したことにビヤは大満悦であった。最高司令官の護衛部隊として三百人を連れてカランサのもとに向かっていたエレラも、北部師団に止まることを決意した。ビヤとカランサの修復できない離反は公にはならなかった。こうして北部師団はウエルタ軍打倒と、更にメキシコ市への一番乗りを果たすべく一路サカテカスを目指した。108

98. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P331

99. Ibid. P332

100. Ibid. P332

101. Ibid. P335

102 Ibid. P336-337

103. Ibid. P344

104. Ibid. P344

105. Ibid. P345

106. Ibid. P346

107. Ibid. P346-337

108. Ibid. P348